



Title	学生生活と日本経済
Author(s)	濱田, 康行
Description	巻頭言
Citation	信用組合, 54(3), 2-3
Issue Date	2007
Doc URL	<a href="https://hdl.handle.net/2115/20580">https://hdl.handle.net/2115/20580</a>
Type	article
File Information	shinyo54-3.pdf



## 学生生活と日本経済

### 〈学生生活実態調査〉

学生はある意味では典型的な消費者だから、彼らの生活ぶりから日本経済の現況を探るのも有効な方法だ。以下は、大学生協連が毎年行っている調査に基づいている。

### 〈生活費・収入の推移〉

生活費は自宅から通学する者（自宅生）とそうでない者（自宅外生・アパートや寮）では大きく異なる。2006年は自宅生5万8千円、寮生10万円、その他の自宅外生12万6千円である。自宅生の20年間を見ると、1980年4万1千円で、期間中のピークは1992年と98年6万5千～3千円があり、この数年は低下している。寮生以外の自宅外生でみてもほぼ同様の傾向で、ピークは1998年の13万円で最近はやや低下している。収入の内訳を自宅外生で見ると、中心項目は親からの仕送りだが（2006年で約60%）、ここでもピークは1998年にある。注目すべきは仕送りの占める比率が傾向的に低下し、その分アルバイトの比率が上昇していることだ。学生の就業経験も将来のためになる職種なら問題ないが、実はそうでもなく、かつアルバイト専念となるとさらに問題だ。

### 〈支出〉

食費が最大項目（約18%）なのは“学生”であることを考えれば当然だが、問題なのはこれが下がっていることだ。調査期間中のピークは1992年の3万3千円だが2006年は2万5千円（自宅外生）とずいぶん下がっている。型どおりに言えばエンゲル係数の低下は豊かさの証明だが、一食当りが300円をはるかに下回っているのは食生活の貧困化だ。

教師としてもっと心配なのは書籍費だ。2006年は一ヶ月で2千5百円という驚くべき数字になった。これは専門書一冊分にも相当しない。他方で電話代は5千円～1万円の範囲にある。その昔（学生運動盛んなりし頃），“書を捨てて街に出よう”というのがあったが、今は初めから持っていないのだ。

要約すれば、学生の収入は親からの仕送り減で増えておらず、そのため食費は切り詰め本は買わないという姿になる。まさに、体にも頭脳にもよくない状況が“景気回復下”の学生の実態である。

### 〈アルバイト〉

学生の第二の収入源はアルバイトである（約19%）。平均すると約8割の学生がアルバイトをしている。平均収入は期間中を通じて2～3万円に変化していない。変化したのはアルバイトの動機である。生活の維持という回答が1980年の8.9%から2006年には19.1%に上昇している。寮生の答えは32%とさらに高い。学生の多くが生活のために働かざるを得ないというのは先進国なのだろうか。生活のためと言われたら、無理に授業に出て来いとも言にくい。アルバイトの職種も変化している。一昔前はアルバイトといえば家庭教師だったが現在では接客・サービス業が中心である。多くの学生がレストラン、居酒屋、コンビニで働いている。この傾向は外国人の留学生にも当てはまるようだ。学生が頭脳を生

かした職種についている例は極めて少ない。

#### 〈傾向〉

学生自身はこうした状況をどう見ているのか。意外かもしれないが、「大変楽だ」と「楽だ」が43%ある。武士は食わねど…なら良いのだが、学生が生活の苦楽の基準をはっきり持っていないからだろう。それでも今後の見通しを聞くと、少し良くなるより少し悪くなるの方が多い。彼らも、漠然とではあるが日本の将来への不安を共有している。

生活を良くするにはどうするか。多くの答えはアルバイトの増加で、仕送り増を希望するのは2%弱。親としては有難いような情けないような数字である。

#### 〈生活と勉強〉

朝食を食べている自宅外生は2006年で61%と意外に高い。傾向的に見ても摂取率は上昇している。昼食代の平均は400円、20年間あまり変化していない。

本を買わないのだから当然かもしれないが約3分の1の学生が一日の読書時間ゼロである。堂々と答えられると教師も困るのだが、日常的にほとんど読書をしないと答えた学生が35%もいる(1985年は20%弱)。これが事実なら、学力低下は小中学校だけでなく大学生でも確実に進んでいることになる。もっともパソコンの保有率は100%に近いから、読書をしない分、インターネットから情報を得ているという推測はあり得る。

読書はしないが大学へは真面目に行っている。週に5日間行くと答えた学生が54%もいる(1985年は29%)。大学生生活の重点を勉学第一と答える学生も28%で1985年より10%も増えている。だから十分に希望はあるのだ。

#### 〈むすび〉

学生生活から見ると景気が回復しているとは言えない。少なくとも彼らの生活に改善は見られない。浮かび上がってくるのは、収入減をアルバイトで補い、食生活が貧困な、書を読まぬ学生像である。むしろ彼らの生活の質は低下している。これを改善するのも日本の課題のひとつだろう。なんとなれば、経済的繁栄を経験した日本の次の目標は文化大国であり、そのためには教養ある若い世代が育つ必要があるのだから。